

# 一心寺かわら版

第二十号 平成二十二年九月発行

「ワールドカップを終えて、南アフリカを見つめる」

今年、冬季オリンピックに続き、世界最大のスポーツイベントであるサッカーワールドカップが南アフリカで開催されました。初のアフリカ大陸での開催、治安の不安が指摘されていたので観戦に行くには少し勇気が必要だったようです。しかし、実際に起こった犯罪は少なく、大きなトラブルなく閉幕。開催したFIFA（国際サッカー連盟）や南アフリカの関係者も胸をなでおろしていることでしょう。



大会はスペインの初優勝で幕を閉じましたが、日本代表も奮闘しました。大会前の調整試合の結果が散々だったため前評判は低く、岡田監督へのバッシングが続きましたが、蓋を開けてみれば予選リーグを二勝一敗で通過し、決勝トーナメントへ。地元開催以外での勝利、予選リーグ突破は初めてということもあり、徐々に盛り上がりを見せました。決勝トーナメント一回戦のパラグアイ戦では延長でも決着がつかずPK戦にもつれ込み、残念ながら力尽きました。PKを外した駒野選手を慰めるチームメイトの姿が印象的で、大会を通してチーム一丸となっていた姿は清々しく感じました。



は目にするのが少ないように思います。ワールドカップで目が向いたこの機会に、南アフリカに注目してみたいと思います。

第二次世界大戦後、アフリカ諸国が次々と独立し、アメリカでは白人種のみによる選挙により勝利したNP（国民党）が「分離」、「隔離」を意味する「アパルトヘイト」を実施しました。すべての人を白人、カラード、インド人、アフリカ人に分類し、人種間の結婚を禁じ、黒人は自由に国内を移動することもできず、白人向けの施設を使用することもできず、参政権さえ与えられませんでした。声をあげた者は容赦なく投獄され、命さえ奪われていきました。また、白人同士であるオランダ系移民とイギリス系移民との軋轢、アフリカ系にもそれぞれの部族間で対立があるなど利益が絡み合っており、より事情を複雑にしていたようです。それに対して、ANC（アフリカ民族会議）は反アパルトヘイト運動を展開していました。ネルソン・マンデラ氏は一九九〇年に二十七年間の獄中生活を終えてANCの指導者となり、その中心となって活動していました。そして、ついに一九九四年四月、

全人種による初めての選挙が行われ、その結果、ANCが第一党となり、マンデラ氏が大統領に就任しました。彼は大統領就任式典の演説で、「私たちを分断してきた深い溝に橋を架けるべき瞬間がやってきた。建設の時代は、私たちの肩にかかっている。私たちはついに、自らの政治的解放を達成した。：私たちは、いまだに続く貧困、剥奪、苦難、性差別、その他の差別の束縛から、すべての民衆を解放していくことを誓う。：黒人も白人も、すべての南アフリカ人が胸を張って歩くことができるような社会を、す



(Wカップとマンデラ氏〔中央〕)

アパルトヘイトは撤廃されたものの、現実として差別が全くなかったわけではありません。鉱物資源が豊富で、アフリカの国の中ではインフラが良く整備されていることもあり、アフリカ進出企業の拠点がひしめくなど経済は発展していきませんが、白人と黒人との間の経済格差、それまでの歴史的背景による貧富の差は深刻なままで、それが劣悪な治安の背景となっており、今でも殺

人事件が一日当たり約五十件(人口は約五千万人)発生するなど、その治安は紛争地域を除けば世界最悪といわれます。

松本仁一氏はアフリカの国を以下の四つに分けて説明しています。「①政府が順調に国づくりを進めている国家。②政府に国づくりの意欲はあるが、運営手腕が未熟なため進捗が遅い国家。③政府幹部が利権を追いもとめ、国づくりが遅れている国家。④指導者が利権にしか関心を持たず、国づくりなど初めから考えていない国家。①に該当するのはボツワナぐらいだろう。②がガーナ、ウガンダ、マラウイなど十カ国でいど。③がアフリカではもっとも一般的で、ケニア、南アフリカなど多くがここに入る。④はジンバブエやアンゴラ、スーダン、ナイジェリア、赤道ギニアなどだ。要するに、この大陸の多くの国では政治指導者が腐敗し、そのため国民が犠牲になっているのである」と指摘しています。

アパルトヘイトを撤廃したANCですが、政権を取った瞬間から腐敗は始まり、マンデラ氏の後任ムベキ氏やズマ氏はその混乱に拍車をかけているようです。日本を分類するならばどの部類に入るでしょうか。

一九九三年の南アフリカでは、白人とアフリカ人の平均所得には十二倍の開きがあったそうです。人口の一割強しかいない白人が全収入の約五十九%を占めて、人口の八割近くであるアフリカ人は約二十九%だったそうです。黒人の失業率は四十〜五十%と言われ、八十年代の教育の荒廃により、アフリカ人を中心として一千万人ほどの人々が文字の読み書きができなかったそうです。現在も失業率は二十五%ほどだと言われています。貧困層の若者は教育レベルが低く、命の大切さについて親からも先生からも学ぶ機会がなく、その結果、簡単に人を殺すようになるそうです。

世界保健機関（WHO）の二〇一〇年の世界保健統計によると南アフリカの平均寿命は五十三歳。報告が上がっている一九二カ国中で、南アフリカ以下の国は二十カ国、アフガニスタン以外はすべてアフリカ諸国です。現実には四十歳を切る国もあると言われています。日本では昭和二十年に五十二歳、昭和四十年頃には七十歳を超えており、現在は男性は七十九歳、女性は八十六歳を超えています。

そこで当山にある過去帳を見てみました。昭和四年に亡くなった方の平均年齢はなんと三十二歳です。その中で約四割が五歳未満の子供たちでした。織田信長が「人間五十年」と『敦盛』を謡い舞ったことが有名で、当時から人生は五十年と思っていました。そうではなかったと気付かされました。

一歳未満の乳児死亡率は南アフリカが千人当たり四十八人、世界平均は四十五人で、日本は三人だそうです。近年減少しているとはいえ、ユニセフの報告によると世界の五歳未満児の死亡数は年間八八〇万人だそうです。ある少女が南アフリカで「ここでは人の命の重さがとても軽いね」と語ったことばがその事実の残酷さを表しています。その多くは基本的な保健サービスや安全な水があれば助けることができるものだと思います。おそらく戦前の日本でも同じだったでしょう。



（新しい毛布を喜ぶ南アフリカの子供）

私たち日本に住む者は、このような南アフリカなど遠い国の問題をどのように考えていかなければならないのでしょうか。

峯陽一氏は「南アフリカ社会の深層では、拡大する貧富の格差、膨れ上がる失業者、深刻な環境破壊、近隣諸国からの移民の急増といった、いくつもの「時限爆弾」が時を刻んでいる。これらは、アフリカのみならず、世界の多くの地域が共通して抱え込んでいる問題でもある。だが、人間たちが作り出した問題は、人間たちの手で解決することができはずだ」と語っています。私たちにも共通の問題であり、解決に向けて努力すべき人間の一人であるということでしょう。

お釈迦さまは約二五〇〇年前に現在のインド辺りで教えを説きました。インドには四姓制度、カースト制度といって生まれながらに身分制度がありました。現在も異なるカースト間で結婚したカップルを、家の名誉を汚したと言って親族らが殺す事件が年間千件近く起こっているそうです。そういう差別に対してお釈迦さまは「生まれによって賤しい人となるのではない。生まれによってバラモン（四姓制度の最上位）となるのではない。行為によって賤しい人ともなり、行為によってバラモンともなる」（『スッタニパータ』と、生まれによっての差別を認められませんでした。また、誕生されてすぐに七歩あゆまれ、右手を上げ「天上天下唯我独尊」（てんじょうてんげゆいがどくそん）とおっしゃられた、という言い伝えがあります。これは後世の創作でしょうが、仏教徒によって込められた大切な心が表されていると思います。一般には、いのちはそれぞれ一つ一つが尊いという人間の尊厳を表したことばだと言われますが、それだけの理解では浅いように思います。このことばは「天上天下唯我為尊。要度衆生老病死」（『長阿含経』）とも伝わっています。生まれ老い病に伏し死する人々を

度す（救う）ことを要とするためにただ私は尊い、と読めます。これを踏まえて考えると、すべてのいのちを慈しみ生きていこうとするとともにこのいのちが尊い、すべてのいのちが尊いということが成り立ってくる。つまり、そのいのちの真実を覚る（ブツダとなる）ことが尊いということを表したものと言えるでしょう。



（Wカップチケットを手に興奮する人々）

ワールドカップは人種間の融和に一役買ったようです。白人も含めてさまざまな人種の国民が黒人文化とみなされている民族楽器であるブゼラを吹きならし、我が国の代表を応援しました。これをきっかけとして手を取り合うことができれば素晴らしいことです。しかし、それには、サッカーやラグビーを通して国民意識が高まっただけでは不十分でしょう。事実、ワールドカップ終了までしばらくなりを潜めていた移民労働者に対する襲撃が復活し公務員による一三〇万人規模のストライキで病院や学校はマヒ状態に陥っているそうです。やはり、本当にすべてのいのちが尊いと気付くことが必要不可欠だと思います。マザーテレサのことばに「愛の反対は憎しみではなく無関心である」とあります。貧困と争いに苦しむアフリカの人々にも目を向けて、自らを省みていきたいものです。

参考『アフリカ・レポート』松本仁一著、岩波新書

『南アフリカ「虹の国」への歩み』峯陽一著、岩波新書

## 仏教が生んだことば②「分別」（ふんべつ）

「分別」とは（小学館新選国語辞典）、経験にとみ、物の道理をよく知っていること。常識にそった判断力とあります。その反対である「無分別」は、あとさきを考えないこと、思慮を欠いた状態とあります。「分別」は仏教においても使われる言葉ですが、その意味するところは現代の用法とは反対です。

仏教で「分別」というときは、個人の経験や考えによって作り出された認識（妄想）という意味であり、「無分別」は、その認識にとらわれず、ありのままに正しい真理を理解することです。人間は何かを理解しようとする、「分かる」ということばの示すように、物を「分ける」こととなります。判断（物を半分に分断）というように、人間は一つのものをもそのままでは「知る」ことができず、二分することを通して初めて知ることができます。したがって、知識で捉えられた世界は、必ず前後・左右・善悪・美醜という相対差別の姿であらわれます。

しかし、二分された姿はたしてありのままの姿なのでしょう。真の姿を捉えようと思うならば、物を二つに分けて差別する「人為」（分別）をなくし、「無為」（無分別）によるしかない、と考えられます。勉強ができない、足が遅い、格好悪い、すべて「分けて」比べることによって起こってくる苦しみです。人種差別も同様でしょう。難しいことですが、ただそのものをまっすぐに見つめる、子供と接するときなどは特に大切ではないかと思えます。現代の社会は、ひたすら「分別」の方向で進んできています。その果たした役割は十分に認めながらも、この辺りで「無分別」、相対的なものの見方を離れた絶対の立場からのものの見方というところを、今一度省みる必要があるのではないのでしょうか。

『仏教が生んだ日本語』大谷大学編より抜粋編集